



名古屋港新土砂処分場現場で うみの現場見学会 開催

学生 32 人が参加！ 海洋土木の大切さを知る



日本埋立浚渫協会は8月1日、第28回「うみの現場見学会」を「名古屋港新土砂処分場建設工事」で開催しました。14の大学などから32人が参加し、工事現場を船上から見学しました。

うみの現場見学会は、社会の皆さまに港湾整備の重要性や港湾土木技術などへの理解を深めていただく目的で、2003年から毎年開催しています。当協会の山下朋之企画広報委員長からは「海の土木工事を見る機会は少ないと思うので、海上から現場を見ていただき、ダイナミックなインフラ整備の様子を間近で感じてほしい」とあいさつがあり、国土交通省中部地方整備局の白井正興名古屋港港湾事務所長からは、名古屋港で進めている事業の目的をご説明いただきました。

名古屋港は愛知県4市1村(名古屋市、東海市、知多市、弥富市、飛島村)にまたがる日本最大規模の港で、総取扱貨物量、輸出額、貿易黒字額が国内港のトップを誇り、中部のものづくりを支える重要な物流拠点となっています。

港内には、1級河川の庄内川から年間約30万 m^3

の土砂が流入してくることから、土砂で航路が埋没するのを防ぐため、継続的な浚渫を行うことで船船の大型化や取扱貨物量の増加に対応し、港湾機能の強化・維持を図っています。

浚渫した土砂は現在、名古屋港ポートアイランド(PI)で受け入れていますが、計画埋め立て高さ以上に土砂を積み上げて仮置きしている状態で、受け入れ容量がまもなく限界に達する見込みです。そこで、名古屋港新土砂処分場建設工事では中部国際空港(愛知県常滑市)に隣接した約294haを新たに土砂処分場として建設し埋め立てていきます。埋め立て土量は約3800万 m^3 で、まずは、西側工区で、護岸を整備しながら埋め立てを実施します。西側工区の埋め立て期間は約15年で、その後の南東側工区を含めると約32年で全体の埋め立てが完了する予定です。

見学した皆さんは、大型見学船で名古屋ガーデンふ頭を出発し、名古屋港内のふ頭の様子を海上から見学しながら現場に向かいました。船内では、発注者や工事施工を担当している技術者の説明に耳を傾け、メモを取ったり、デッキに上って写真撮影したりするなど、うみの現場への関心の高さが伺えました。

見学後の現場関係者との質疑応答では、工期設定や施工の留意点、潜水士の仕事など、さまざまな質問が寄せられました。参加した学生からは「実際の現場を見ることで、授業で学んだ海洋土木の知識をより深く理解できました」といった感想をいただきました。

見学会参加を通じて、日本の経済、生活を支えている建設産業に一層関心を持ってもらえるよう、これからも「うみの現場見学会」を充実してまいります。



事前説明を聞く参加者



船内で説明を受けながら現場へ移動



船上から新土砂処分場現場を見学